

花巻市博物館

研究紀要

—第19号—

目次

- 多田等観の花巻における足跡 —日記、『観音堂記録』、書簡から— (2)
…………… 松橋 香澄 (3)
- 2023年における花巻空襲に関する調査の進展について …………… 布臺 一郎 (23)

令和6 (2024) 年3月

序

コロナ禍も治まり、全国各地の博物館・資料館等にも入館者が戻りつつあると聞いております。当博物館においてもその傾向は顕著にみられ、学校の博物館見学や出前授業なども数多く行われるようになりました。

当博物館では、2004年4月の開館以来、毎年資料の収集・保管・調査研究を進めるとともに、企画展や特別展、教育普及活動など様々な事業を行って参りました。その中でも調査研究活動は、より充実した博物館活動を推進する上で基盤となるものであり、新たな発見や疑問などを専門的な見地から考察し、その成果を展示活動に反映させるだけではなく、「活字」という形で残していくことも重要であると考えています。

本研究紀要は、今年度の調査研究の成果をまとめたものであり、当館に数多くの資料が収蔵されておりますチベット学者・多田等観の日記に関する論考、及び1945（昭和20）年8月10日の花巻空襲によって犠牲になった台湾出身の医師に関する調査続報を掲載しております。今後とも調査研究活動の充実を図り、地域の文化の向上・発展に寄与できるように努力して参りたいと考えておりますので、ご意見をいただければ幸いです。

最後になりましたが、本研究紀要を刊行するにあたり、ご協力をいただきました皆様に厚く御礼を申し上げますとともに、より一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年3月

花巻市博物館

館長 中村 良幸

多田等観の花巻における足跡

— 日記、『観音堂記録』、書簡から — (2)

花巻市博物館 学芸員 松橋香澄

1. はじめに

多田等観(1890～1967)は、秋田県出身の高名なチベット学者である。ダライ・ラマ13世と師弟関係を結び、10年にも及ぶ現地での修行生活の末、チベット仏教に関する様々な資料を日本にもたらした。

等観はこうした資料を戦禍から守るため、実弟が住職をしていた花巻の光徳寺に疎開させる。しかし、光徳寺も空襲の被害に遭う可能性が高かったため、湯口村(現、花巻市湯口)に居住していた光徳寺の檀家の蔵に分散させ資料を守った。これが縁となり、等観は度々花巻を訪れている。

本稿は多田等観が花巻で過ごした日々について理解をより深めることを目的に、等観が記した日記と『観音堂記録』、花巻市博物館で所蔵している等観に宛てたものや、等観が送った書簡を一覧化したものである。

前稿(『花巻市博物館研究紀要第17号』、2022年)では、昭和19年(1944)から昭和22年(1947)についてとりあげた。昭和22年はダライ・ラマ13世恩賜の千手千眼十一面観音立像を円万寺観音堂の本尊として納めたり、等観の花巻での活動拠点として一燈庵が完成したりと、花巻との結びつきが深まった年であった。

本稿では翌23年から、スタンフォード大学に新設されたアジア研究所の教授として招聘され、渡米する昭和26年(1951)までを取り上げる。

なお、この一覧は幅広い世代の閲覧に供することを目的として作成した。そのため、漢字や表記などを現在の言葉で言い換えている部分があるので、ご承知置きいただきたい。

2. 等観の日記と『観音堂記録』について

日記については寺澤尚氏が「多田等観と花巻 — 多田等観の日記を中心に —」(『花巻市博物館研究紀要第5号』、花巻市博物館、2009)において詳しく紹介しており、本稿の一覧もこれを参考にした。寺澤氏はこの時、明治45年(1912)から昭和41年(1966)3月までの日記のうち、花巻と密接な関わりを持つ昭和20年頃から渡米する昭和26年までの日記について調査し、まとめている。

また、円万寺観音堂に納められている『観音堂記録』は、昭和22年(1947)から昭和25年ま

での間に、等観が円万寺観音堂に係った出来事の一部を記録したものである(寺澤2007)。この『観音堂記録』の内容については、同氏の「資料紹介 多田等観が記した『観音堂記録』について」(『花巻市博物館研究紀要第3号』、花巻市博物館、2007)にまとめられており、本稿の一覧はこれを参考に作成している。

3. 等観の書簡について

等観の書簡については、花巻市博物館で所蔵しているものを中心に紹介する。

これは平成13年(2003)に花巻市膝立の照井テフ氏から花巻市博物館建設推進室に寄贈されたもので、等観と交流の深かった照井忠太郎氏とその息子の昇氏に充てた102通もの書簡である。

また、「チベット学の先駆、多田等観と花巻～博物館に寄贈された多田等観の書簡類を中心に～」(『花巻市博物館研究紀要第2号』、花巻市博物館、2006)において、寺澤氏が紹介したものを補完するかたちで、新たに解説した書簡についてもまとめた。

参考文献

畠山博志『修訂増補観音山』(1995)

寺澤尚「チベット学の先駆、多田等観と花巻～博物館に寄贈された多田等観の書簡類を中心に～」『花巻市博物館研究紀要第2号』(花巻市博物館 2006)

寺澤尚「資料紹介 多田等観が記した『観音堂記録』について」『花巻市博物館研究紀要第3号』(花巻市博物館 2007)

寺澤尚「多田等観と花巻—多田等観の日記を中心に—」『花巻市博物館研究紀要第5号』(花巻市博物館2009)

松橋香澄「多田等観の花巻における足跡—日記、『観音堂記録』、書簡から—(1)」『花巻市博物館研究紀要第17号』(花巻市博物館2022)

湯口郷土誌編集委員会『湯口郷土誌』(花巻市湯口公民館1989)

渡部芳紀編『宮沢賢治大辞典』(勉誠出版 2007)

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和23年	1月	★ 観音堂宮殿奉安、二十二年十二月二十二日より、花巻町小原仏師登山、宮殿を造作し、凡そ一か月にして完成す。手間代金五千圓也。謝礼五百圓也。寄贈す。庵室建築残余金を以て支払	
	1月1日	● 元朝を山上で迎う。	前年に一燈庵が建てられたからか、12月8日より1か月程度花巻に滞在している。
	1月2日	● 早朝下山して矢沢の講演に赴く。歳の神の女連中と同行、友三氏宅にて般若心経の講義一村長等知識階級の人多し。経台を講ずる。この夜安野の多田佐宅御取越に行き泊る。	
	1月3日	● 附近の御取越五軒程勤める。午後般若心経の講義する。五漢皆空度一切苦厄まで打ち切る。夜宴会。	
	1月4日	● 半兵衛葬式法事。後登山。小原彫刻師と同宿す。	
	1月21日	● 花巻出発、仙台に赴く。	
	2月	★ 本堂鑿子、サシ渡凡そ八寸、価格金八百二十圓也。下門膝畠山善兵衛寄進	
	2月26日	● 下り二時間半遅着、六時ころ花巻に着	
	2月27日	● 矢沢に行く。ダルマを長左エ門に返却し、法隆寺色紙「仏」を与う。熊谷友三宅で昼食に茗茶と甘い餅を頂く。鳥宅に行く。	
	2月28日	● 小原仏師から硯箱なおして貰う。安部医師に太田花巻の三月二十五～七日の診療の件はがきを出す。	
	2月29日	● 高屋敷に赴き彼家の観音会の計画を語る。畠山勘次郎、照井忠太郎来る。	
	3月	★ 本尊前座布団一・鍋倉上区組観音講寄進、庵室座布団二・佐々木敬二・佐々木富夫寄進、阿弥陀堂座布団一・上門膝照井ケウ寄進	
	3月2日	● 盛岡赴。午後四戸翁来訪、夕食を共にする。この夜泊る。	
	3月10日	● 八時土崎発、三時ころ花巻に着。郷里を語る。	
	3月11日	● 矢沢比良木熊友宅にて虫供養法供養を語る。この夜熊長等と夕食す。	
	3月12日	● 太田昌歎寺に診療の安部氏一行を訪問する。この夜昌歎寺二階に泊る。来診者六十余名。	
	3月13日	● 昼食にそばの馳走ある。来診者凡そ九十名余。高屋敷に帰る。安部氏その跡を襲って高屋敷へ来る。一家調子揃って大笑いをする。	
	3月14日	● 老人目まいするとて倒れる。安部氏宮野目に行く。	宮野目 →現・花巻市宮野目
	3月15日	高屋敷にて袈裟を縫う。落暮完成する。立派に出来上がる。柏田にて落成祝の宴がある。安部氏も共に招待される。下門膝部落并に家族等も来臨大賑わいである。田植踊が始まる。女子供の踊に青年女装した踊一八という道化者が入りて益興が湧く。大黒踊なども出る。安部氏一行喜ぶ。十二時帰りて寝る。 ★ 七条袈裟一領、チベット七条に摸して作られたるもの。下門膝観音講中にて家々より絹糸を集め手織に織り上げ、之を、講中手縫にて作る。柏田、畠山林吉宅にて奉納式を行う。尚ほ上根子照井善右エ門、照井寅吉より絹糸の補給を受く。手織せし婦人下門膝畠山キツ、畠山ナカ、畠山ミヨノ、世話人、畠山友治	
	3月16日	● 安部氏帰仙。予根岸徳松の葬式法事に赴く。勘次郎観音供養会案内状を印刷する。	
	3月17日	● 花巻赴く。靴修繕。宮政（宮沢政次郎）を訪問。	
	3月18日	● 忠太郎荷背負いをして登山、久し振りで庵室に入る。	
	3月19日	● 山口戸来友蔵の葬式に行く。高村光太郎氏を訪ぬ、郷土民加エアトリエ建設のデマを語る。	
	3月20日	● 観音供養会、義蔵来援、午前午後法要説教をする。大雨なり。参詣者三十名ばかり永代五志二百圓収納	
	3月21日	● 彼岸中日、家々の彼岸参りの往復の為め参詣少なし。午前は休会、午後参詣三十名位。櫻羽場秀三出勤す。下門膝方面より餐応ある。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

多田等観の花巻における足跡 — 日記、『観音堂記録』、書簡から — (2)

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和23年	3月22日	● 参詣依然少なし。慣例とならざるためか。志五百二十円也。御布施地藏さん二百円、光徳寺二日出勤三百円送る。盛岡師範校教員学生二名来る。仏教につき質問する。宿なく高橋周助氏宅に連行される。	盛岡師範校 →現・岩手大学教育学部
	3月23日	● 花巻へ下る。正午下駄屋の法事に出る。姉崎に餅をおくる。この夜泊る。鳥宅訪問。 ★ 本堂木製香炉、下門膝島山キツ、島山ナカ、島山ミヨノ寄進	
	3月24日	● 帰山、高屋敷に立寄る。夜半寒さに耐えかねストーブをたく。	
	3月25日	● 神社の祈願祭多勢来る。終日北風寒。	
	3月27日	● 二月十七日の縁日鍋倉上区の連中座布団一枚寄付あり。佐々木敬二勇夫より小座布団一枚づつ寄贈ある。同時に献納式白酒二合ずつ二十本已上持より大宴会となる。二ツ堰の葬式に行く。晩土井かまど観音講に行く。大いに賑わいであった。	かまど →分家
	3月28日	● 今晚田植踊見物のため高村光太郎氏招くため友治氏山口へ行ったが果さず。	
	3月30日	● 忠太郎白酒壺持来る。晩高橋周助方にて青年に仏教を語る。九時参集十一時半終る。山に帰られずに	
	4月1日	● 花巻で柴田の法事ある。	
	4月3日	● 森腰法事に行く。	
	4月4日	● 万丁目佐々木葬式に行く。この夜山に泊る。	万丁目 →現・花巻市万丁目
	4月9日	● 東京移住の者の女房不幸の葬式法事に参る。おひな祭	
	4月10日	● 別の転住者の骨を持来り読経す。	
	4月11日	● 旧三月三日節句。午後になりて勘次郎、廉三九氏を山上から案内して来る。横内と男も来る。続いて宮沢政次郎氏や石鳥谷附近の工藤という石原莞爾信奉者の男や及川女史等も来る。乗客満員。	石鳥谷 →現・花巻市石鳥谷町
	4月12日	● 定例説経、佐野来る。黑白二そを語る。	
	4月13日	● 正午団体帰る。	
	4月14日	● 高屋敷で昼食する。医療班の事に就き語る。照井勇五郎庫からデルゲ版大蔵経目録二部とり出す。山に帰る。照井忠太郎息子巳喜台所の流しを修繕に来る。暮に出来上がる。中央山道麓の桜一輪二輪咲く。	医療班 →安部氏一行
	4月15日	● 及川アサヨの担当クラス動員で勇五郎庫のデルゲ版大蔵経虫払いをする。デルゲ版大蔵経見付ける。持出す。忠太郎宅で昼食す。夜忠太郎来り草餅を一ト重持参。全て平ぐ。湯口で診療班ことはり来る。	
	4月16日	● 夜半雨、朝遠谷近谷で鶯鳴く。	
	4月17日	● 鍋倉及川氏宅泊る。同地火祭りである。	
	4月18日	● 鍋倉から花巻中学まで徒歩にて花巻に来る。駅に安部氏一行治療班を迎い、矢沢平良木に赴き熊谷友三氏宅に泊る。	
	4月19日	● 矢沢中学校診療、中学校にてジャ香鹿の事話する。此夜熊谷氏宅に椀そばの大馳走に診療班の連中大喜びである。	
	4月20日	● 熊谷氏宅にて診療する。夜村長も来りて大に歓待ある。	
	4月21日	● 昼食後湯口村に出発雨中行進駅にて見送りの方々に別れる。高野橋家に向かう。学校の雨の桜を通る。歓待をうく。忠太郎六郎等々。 ★ 緑地週間記念植樹、杉苗、主催岩手県山林課、森連組合花巻支所	
	4月22日	● 湯口方面の診療ある。モヤタの周旋である。郵便局員や村の衛生部員も来る。	
4月23日	● 百目木平賀宅にて診療。山に森林組合の植林杉苗百本ある。登山これ等の人々を迎ふ。山掃除の人々来る。百目木まで下り長野局長視察のため来村す。雨中に照井勇五郎宅まで行進す。		
4月24日	● 勇五郎宅にて診療ある。例の通り歓迎宴始まる。		

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和23年	4月25日	● 餅つきで歓待される。三月十七日観音山の祭。村の火祭りと同時に。天気よし、午前中他村から観音祭五六部隊もある。庵室の来客、地蔵、清水、診療班一行。鈴木、佐々木宏。岩谷堂服部老女、渡辺夫人、高村光太郎氏等。十一時読経終りて庵にて祝宴ある。大いに飲む。高村氏遅れて来る。神楽を熱心に見る。五時過散会、班一行は高屋敷に行く。此日下円膝から前卓一脚寄付になる。予も高屋敷に行き歓迎慰労宴に加わる。一行大いに喜ぶ。	
		★ 観音堂前卓一脚、下円膝部落寄進、世話人畠山善兵衛、金式千五百円、附白米二斗七升、花巻仏師造寄進人左の如し(省略)	
	4月26日	● 午前十時安部氏一行帰仙に登る。登山、庵室を整頓す。友治氏布団を持って下山、此夜高屋敷最終の宴ある。	
	4月27日	● 八時五五分高屋敷を出て花巻に向かう。終日静養す。	
	4月28日	● 十時二五分花巻駅発にて仙台に向かう。	
	7月	★ 恩賜郷倉移転。昭和二十二年十月当部落各区代表より書類を以て湯口村長に対し、円万寺恩賜郷倉を観音山に移転し、永く恩賜の尊き御趣旨を奉戴すべき次第の承認を求めた。これに就き、翌昭和二十三年七月代表者高野橋六郎、照井忠太郎の兩人湯口村役場に出頭し、村長よりその承諾を得た。そこで直ちに部落各戸より奉仕人夫の協力を得て七月二十三日中村部落の元所在地にて解体作業を開始し即時運搬に努め、二十四日立柱式、二十九日屋根瓦ふき完了を以て、移転の仕事を完成した。この間三百有余名の労力奉仕があり、高野橋六郎、照井忠太郎は終始監督の任に当り、宮川喜代見、高野橋太郎、照井巳喜等は、特殊技能を以て協力された。また畠山勘次郎、神山弥八、佐々木徳松、畠山友治、高橋儀七、高野橋六郎、照井忠太郎等より物資を供与し声援された。同八月四日多田等親所蔵のチベット經典を移してこの宝庫に保存奉安した。	チベット招来資料を保管するための「経蔵」を観音山に建築することになり、中村部落の「恩賜郷倉」が移築された。恩賜郷倉とは昭和9年(1934)、10年の大凶作の際に、天皇からの下賜金をもとに作られた穀物備蓄のための倉庫。観音山に移築された郷倉は、昭和58年(1983)に積雪によって崩壊したという。
	7月5日	● 午前中花巻に到着、小原仏師を訪ねる。法隆寺行きのことを説明する。	この年の5月13日から18日にかけて、法隆寺を訪問していた等観が小原仏師を法隆寺に招聘する相談をしているので、この件と思われる。
	7月6日	● 午後は宮沢政次郎氏を訪問し雑談した。	
	7月8日	● この夜小原から招かれる。白馬を振舞われる。義蔵飯寺、法隆寺行、小原氏の話、漆の話などある。	
	7月9日	● 昼食後荷物を背負い高屋敷へ行く。老人元気、庭に出て掃き掃除など出来るようになる。久し振りで家族と話す。山の夜泊る。久し振りで庵室に入る。	
	7月10日	● 照井忠太郎方に昼食する。畠山勘次郎同行登山久し。白石より入電一二ヒ来れとて電為替五〇〇送金ある。その意味不明である。三衣一鉢返還を申し出たから、それに対する問題でなかろうか。窓下青田の眺め佳、夜になって忠太郎は高屋敷から夜具と野菜を勘次郎は野菜と味噌など持って来てくれる。蚊は痛い程にさす。蚊帳を吊りて寝る。	
	7月11日	● 終日小雨、夕刻大雨。五月雨かたの天気。雨に見ゆる青田の風光は晴れたるよりかよろしい。座所整頓したれば落ち着く。忠太郎ヨメ女来る。	
	7月12日	● 忠太郎氏と高野橋家を訪問。	
	7月13日	● 雨、雨、勘次郎来る。御詠歌彫刻の事。	昭和22年7月22日に奥田正造から送られた4首の御詠歌のこと。
	7月14日	● 高屋敷立寄、花巻へ向かう。鳥へ立寄、母上祥月法要御逮夜。	
	7月15日	● 盛岡行、願教寺墓参り墓地でおにぎりを頂く。	鳥地大等の墓前を訪れている。
	7月16日	● 英霊分配式一柩内伊藤七兵エ方葬式、笹間往復バス一片十六円也。花巻泊。	
	7月17日	● 昌歎寺太田村民葬。本館金次郎葬儀あり。	
	7月18日	● 柩内忌明け法事、一本杉の河を渡り高屋敷に入。	
	7月19日	● 根岸、久保田清兵エへ悔みして後登山する。勘次郎水くみ等加勢す。巡査二名来る。このごろ強盗この村に出没し不穏ただならず或者盗人、観音山に隠れると。これを聞いて登山せしか。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和23年	7月20日	● 土用入、晴れた日。風冷たい。勘五百円白石からの持参、観音堂の貯金帳展観させられる。旧十四日、夜九時過、天王さまの宵祭なりとて山上参詣者あり。	
	7月22日	● 中村部落二ツ堰照井忠太郎氏宅土用餅振舞われる。講中総動員で郷倉解体馬車で運ぶ。その一部分山上に至る。漸くにして問題となった郷倉が山上に移されることとなった。	郷倉 →昭和9年の大凶作に見舞われた時に、天皇からの下賜金によって新設された穀物備蓄倉で「恩賜郷倉」と呼ばれていたもの。円万寺観音山に移設されたのは中村部落のもの。
	7月23日	● 旧十七日、観音縁日、参詣四五人あり。部落人足八九十人郷倉資材を山上に運ぶ。麓より蟻の如くに運ぶ。青年や中年家主など働き手多く出勤して汗を流してくれたには感謝に堪えぬものがある。南方に北向きに地盤を作って貰う。土台出来上がる。材料全部運搬完了。金之丈餅一重とみそ	
	7月24日	● 昨日より阿弥陀堂にアマタマンダラ幅をかけて供養礼拝する。それ以前は南無佛に毎朝アマタ経を誦経す。今日よりチベットにてポロンカ師から頂いた幅をかかぐ。二十人ばかりの人足来り。柱立、屋根上げなどした。杉樹の間に陰翳し誠に好適の場所である。夕ころ神主鎮地祭の儀式を行う。不相変御神酒出る。供餅散餅は勘次郎、酒は金之丈、六郎、矢川等祝宴の饌初は友治から寄贈のシビを振る舞われた。大いに泥酔。十時に帰る。	
	7月25日	● 照井大工来り普請大いに進む。午後祈願祭執行。	
	7月26日	● 瓦運びで金之丈老人も来る。八十二度	
	7月27日	● 暑さ厳し午後二時八十九度に昇る。午の日なりとて高屋敷から入浴の案内あり。夕刻下山して、その晩泊る。	
	7月28日	● 日中山上。九十二度まで昇る。郷倉の瓦葺きで人々懸命。晩には六郎氏一本、忠太郎一本、儀七一本で御祝宴。御煮は生キウリや味そ、大根おろしである。来参者、上記の人々勘次郎、金之丈、六郎氏孫、高屋敷若者等で皆々酔いて帰る。	
	7月29日	● 地藏さん祭なれど頭重い風邪、行けぬ。屋根の始末が出来。全部完成、鍵を渡す。ゴヘイが屋上に立てられる。六郎忠太郎勘次郎金之丈六郎孫高屋敷若者等来る。金之丈からの一本で芽出度、落慶を祝い、落慶といっても九時ころ散会した。	
	7月30日	● 男女子供等八名草とりに来る私製手帖を与ふ。	
	7月31日	● 五時山を下りて高屋敷で朝めしを頂き、花巻に向かう。	
	8月1日	● 勝男のふしを頂き袈裟衣を背にして帰路に就く。川端権左衛門に立寄りチベット文献保管の好意を謝し観音山文庫へ引き取る旨を述べた。照井勇五郎へも立寄同様申出す。照井忠太郎方昼食す。	観音山文庫 →郷倉
	8月2日	● 早朝山口へ出向。戸来久左エ門を訪問。ラッサ版大蔵引取り交渉する。観音山郷倉よりは吾家の倉庫が安全なる旨言い出す。右者瓦ふきしたばかりであるから当分その光栄を担いたいからであろう。高村光太郎の庵にて八時一三時まで雑談する。不在中及川アサヨ生徒とともに庵の草とりをする。	
	8月4日	● 九時ころ権左エ門勇五郎宅へ保管してある大蔵経の箱がノコノコ籠から上がってくる。チベット紙印刷とはいいかなり重いらしい。皆汗ダグダグ六郎爺は口取先頭であった。正午まで全部登山。宝庫に納まる。勘爺内部で整理する。内容分かっている者のやるような仕方である。ナルタン版大蔵経デルゲ版大蔵経は一応並べられた。六、忠、は更らに神楽堂移す運動を試みた道具としてクワ一挺しかないのに自然を自在に利用して遂にうごかした。落暮までには南面や、西になった位置に移して仕舞う。念力偉力におどろく。風邪が少々頭痛。高屋敷慶蔵氏日本精神叢書四五持参した。	宝庫 →郷倉
	8月5日	● 父上の祥月いろいろ感慨の事多し。湯口中学生男女山上清掃する。男子部昼食などして食事を作る。朝鍋倉講中來山。道路測量に來たとの事。新移転の神楽堂よりする風光極めてよろしい。ツォンカバの五変化高屋敷から届く。郷倉の本尊にする。	ツォンカバの五変化 →チベットから招来した仏画。現在のチベット仏教最大派閥であるゲルグ派の開祖ツォンカバが獅子に騎乗する文殊菩薩の姿を含む、5種類が描かれている。

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和23年	8月6日	● 涼しける日。忠太郎来て泊る。	
	8月7日	● あさ雨なりけるも犯して花巻に向かう。途中ズック靴修繕出来しを受取。九時過帰る。	
	8月8日	● 駅から来る道路を始めて通り来る万丁目神社新拝殿に雨宿りをする。勘次郎小屋大工入り、十時登山及川男と女子師範生四五名来入す。拝殿に愛善会の連中来た。	
	8月9日	● 高屋敷へ行く、記録帳の資料を持参。なす十五頂き帰る。	
	8月10日	● 観音山清掃日は明七日なれども終日勤労を要請するため本日に変更。男子多勢参集す。下の元観音旗立石を大勢の元気で土そりで上げる。神楽堂土台を入れる。其他境内の草とり掃除をする。鍋倉道普請を尋ねに行く。旧十四日なりと周助宅からなすと玉葱を貰う。金之丈よりなす、ささぎ豆、みそ貰う。	
	8月11日	● 七日火の当日みんなのうちに墓掃除する。朝金之丈に餅をいただく。小豆、二、胡麻、一汁一、である。六郎老鳥居の屋敷修繕に来る。	
	8月12日	● 高屋敷老人貞子を連れて病後始めての登山する。面目一新せるを感慨深そうにながめた。鳥居出来上がる。忠太郎来る。及川喜夫にたのんで二ツ堰の人形菓子やに馬頭観音聖観音の土人形の型を作るため二体持って行って貰う。	
	8月13日	● 夜来豪雨終日雨々々。宝庫に入りデルゲ版大蔵経を整理する。忠太郎からゴミ取り、宝庫にて履く草履を貰う。みな他力ならざるなし。	
	8月14日	● 昨夜より午前中の大雨のため花巻御法毛行中止、亀森、八幡村等から清水祭り帰りの観音参り来る、徳力祐憲より来電三十一日朝来山すと。	亀森 →現・花巻市大迫町亀ヶ森 八幡村 →現・花巻市石鳥谷町八幡 清水 →音羽山清水寺
	8月15日	● 雨雲なきよい天気。日中暑八十五六。高甚から花巻宛電、十六日来るとある。小原仏師来山。御詠歌額について相談ある。ズボン直し下山。姉崎へ手紙書く。秋田の大蔵を受理する件。勘次郎水筒持参あり。本堂阿弥陀堂掃除する。	
	8月16日	● 佐々木宏来山。午後四時過帰盛。小原仏師御詠歌額面刻み始める。四時過、徳力祐憲、高甚来山裸体にて三衣一鉢厨子等持参す。蔵王特等品牛肉土産に。特に徳力氏から2000志ある。忠太郎より野菜、米類、夜具調達ある。	ドライ・ラマ13世より下賜された三衣一鉢で、徳力祐憲氏のもとに疎開させていたものを持参したものである。
	8月17日	● 二時ころより起床眠れず起床雑談す。朝勤行後食事用意。八時庵出発下山。前日きた徳力祐憲と高甚が白石に帰る。花巻まで同行する。八百屋の法事に行く帰りに六郎読経する。	
	8月18日	● 鍋倉観音講道普請する人足五六十名来山。細々しながら出来た。忠太郎宅益読経し昼食供養をいただく。	
		★ 鍋倉部落参道開路完成。八月五日鍋倉観音講代表者高橋周助、佐々木啓二、高橋三太郎、高橋庄一、高橋成松、参拝登山参道開通に就き協議を遂げた。	
	8月19日	● 光徳寺からデルゲ版大蔵経壱箱運んでくる。電気臨時灯が山上に点火した。友治君の働き。	
	8月20日	● 高門万寺に読経して後、宮屋敷久保田万次郎宅法事、御詠歌額奉納式上円藤からの寄付である。 ★ 上円藤部落より、御詠歌額寄進。御詠歌は次の四首で当観音に寄せられしもの「はるばると参れば願ひ円万寺仰げ仏の深き誓を」「膝立てて仕え祀ればもろ共に蓮の台に住む心地する」「七難の憂へも除き三毒の心の雲も消え果てにけり」「大慈悲の心を共に仰ぎつつ浮世を変えて浄土とやせん」作者并書者奥田正造先生、刻者小原仏師、世話人畠山勘次郎。	円万寺観音堂は当国(和賀・稗貫・紫波)三十三所観世音の第2番札書。御詠歌は〔松杉も 法をときわの 円万寺 後の世かけて たのみ染滝〕。この額は現在、観音堂の外陣正面上部に掲げられている。

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和23年	8月21日	● 観音夏祭。今まで旧七月十四日なりしを今日より変更する。十一時ころより法要初む。部落戦死者英霊の魂祭する。般若心経を読経する。光徳寺、円妙寺（円命寺か妙延寺間違い）、参勤する。光徳寺法話する。庵室にて阿部健一畠山留治武次郎等昼食す。三時ころ神楽始まる、中村二ツ堰の踊小女参山。鍋倉の鹿踊りも来る。鎌倉玄悦とまる。石神の親爺もとまる。	
	8月22日	● 高屋敷へ見舞に行く。望みなしという。十時湯本の青年男女三人集る。湯口の両校長来る。観音経を読む。昼食して帰る。四時ころ及川アサヨ来る。教組の圧迫を聞く。せき田女、菊屋女等三人にて夕食を作り提灯をともして帰る。	
	8月23日	● 早朝茂弥太御取越に行く。伊三郎宅で昼食御餅供養ある。	
	8月24日	● 忠太郎那須川勇市同行して高松観音参りをする。十時矢沢役場で熊長熊友氏等と会見。助役など同行して高松寺観音参拝。岩根神社拝観日、元観音堂である点など円万寺観音に似ている。昼食酒盛始まる。別当など歓迎員十名程来りて歓待。四時多田佐宅にて観音経を読経して七時帰る。	
	8月26日	● 一本杉組御取越、権左エ門にて終る。落暮帰山せば風呂出来上り、屋敷できている。六郎忠太郎両氏の功績である。 ★ 染井浴室落成。照井忠太郎寄進。名所染滝側に造営。	観音堂の数十メートル下がったところにある染滝の前に水を引いた風呂を作って貰った。四角い風呂桶に片屋根を付けた簡単なものであったが、多田等観は殊の外好んでいたという。
	8月27日	● 新しい風呂をたてて終日楽しむ。	
	8月28日	● 御講で行く、高屋敷見舞する。不在中渡辺女史（富代）来訪ありしと残念。降魔釈迦牟尼世尊像を花巻から経蔵に奉安した。	
	8月29日	● 高屋敷のかあちゃん三十六才を一期に午前三時死亡の由通知あり。棺前にて阿弥陀経誦読を奉誦する。鍋倉火葬場に送る。	
	8月30日	● 灰除けに高屋敷に行く。先鍋倉老母来山。初めてにて風光をながめ帰る。	
	8月31日	● 鍋倉歳の神を訪問。仏画のニセ物を見る。寺院に対する感想を聞く。寺院の方は余程おこなっている。高屋敷の夜はなしに行く。小山田正三知越の導師にて正信偈を上げる。とまる。	
	9月1日	● 金之丈から味噌甕貰う。二百十日の好天気、百姓皆豊年を喜ぶ。	
	9月2日	● 高屋敷葬式。忌明け法事昌歆寺導師紅の衣をきて引導をわたす。紅の衣の紙芝居も見。松山寺も来る。葬式坊主の姿をあはれに思う。	
	9月3日	● 白藤与助一鍋倉新田一法事に行く。	
	9月4日	● 栃内御取越。重吉法事、高屋敷一七日。墓参読経後、忠太郎山の神その俣泊る。	
	9月5日	● 高松寺より観音参り来る一同を風呂に入れて歓待す。本堂、阿弥陀堂、経蔵等参拝。三衣一鉢を披露す。元村長阿部健一郎氏来りて来客に接待す。晩、熊友と歳の神に行き父の法事読経、とまる。	
	9月6日	● 白藤徳蔵、徳之丈の女房葬式に行く。	
	9月7日	● 忠太郎登山、朝霞一本を平ぐ。米五拵台所に入る。上円膝二斗一拵の内一斗三拵入	
	9月8日	● 高屋敷へ義蔵弔問、本尊白藤徳蔵の忌明け、壺軸を予りとして寄贈は田村太郎山上に来る。風呂す。翌朝ひもとき読経す。餐応せんとしたが成らず。この晩一杯献して山上の夢を結ばしめた。一行よりの米七八拵入。	
	9月9日	● 中村部落同行振舞ある。皆々風呂を喜ぶ落暮帰山する。此日櫻羽場秀三氏等民生委員来山。医療班来村を迎ふる件につき相談す。	
	9月10日	● 二ツ堰、尾美英霊葬式。義蔵同行引物に米二拵。	
9月11日	● 高屋敷二七日読経に行く。春日祭同。		
9月12日	● 昼食後雨中草鞋掛けで花巻へ下る。		

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和23年	9月15日	● 光徳寺に暁烏敏来演夫人同伴。火宅無常空ごと戯言あることなしの講題午後と夜の二回。宮沢政次郎一族の来客を廻はされたもの。	暁烏敏 →1877～1954。「歎異抄」を普及した真宗大谷派の僧侶。 明治39年(1906)以降、宮沢賢治の父、政次郎に招かれて以降、晩年に至るまで度々花巻を訪れている。(渡部編 2007『宮沢賢治大辞典』)
	9月16日	● 午後二時診療班着、新田元農業会楼上を宿。婦人会員の接待、一行高屋敷弔問す。櫻羽場氏全責任を以て準備していただく。此夜餅。	
	9月17日	● 豪雨止み大風となる。齋藤市太郎葬式法事。更木永昌寺と対面。無料診察開始、百人。	更木 →現・北上市更木
	9月18日	● 無料診察二日目、百一十人ばかり。花巻祭、花巻町内法事あり下る。 ● 診療登山月を浴る。月光下風呂に入る。畠山覚蔵、照井勇五郎、照井忠太郎、畠山勘次郎来山。一行大に満腹する。	
		★ 電燈工事着手。中村部落より一町用柱を寄進あり。電線その他の設備費金壹萬二千圓也。燈り十二、電球二、筒喜太郎寄進。観音本尊常夜燈一、八坂神社向拝一、庵室一、等点燈す。世話人、照井忠太郎。	
	9月19日	● 一行太田に行く。電灯工夫三人来る。氏子総代観音世話人等援助して電柱をたてる。柱は中村部落寄附なり。電線かねて入手したものは細くて不適切なればとて正規の太線交渉して成る。全部で七八〇〇にて請け負いた。	
	9月20日	● 太田昌歙寺診療班を訪問した。	9月15日から16日にかけて岩手県内はアイオン台風により甚大な被害を受けていた。台風から四日後ではあったが、花巻と白石との往復はかなり困難を伴ったと思われる。
		★ 観音堂、前卓上唐金燈炉一基、宮城県白石町専念寺本尊前卓不滅燈明として使用せる什宝物なりしを徳力祐憲僧正より観音宝前に寄進。畠山勘次郎、水難を犯して搬出運任せり。	
	9月21日	● 義蔵山形へ布教出発、花巻泊。三千円姉崎送金書留。	
	9月22日	● 安部一行来寺一泊。東北本線不通横黒線を経由仙山線にて帰仙するため花巻一泊の要あるため。	横黒線 →現・JR北上線
	9月23日	● 朝七時二十五分出発す。高屋敷に読経昼食す。三時登山。勘次郎氏白石より請来せし卓上灯炉の初奉納す。掛軸用紙百四十枚寄贈。	
	9月24日	● 朝初火入読経す。下山白藤留吉法事義蔵帰寺する。	
	9月26日	● 及川君宅金之丈忠太郎宅訪問する。	
	9月27日	● 光徳寺主来山。始めて入湯。イモノコ汁で一杯かたむけた。午後三時忠太郎、勘次郎来山下山の準備する。雨の山路を下る。金之丈から味噌大根を貰う。高屋敷に入り泊る。老人と知越を語る。	
	9月28日	● 花巻に来る。写真代残八千円、御布施三千五百円、布施。	
	9月29日	● 7時二十五分花巻発折居前沢間其他不通にて横黒線まわりで夜九時ころ仙台に入る。	
	10月17日	● 安部より神崎の紹介で岩手県庁に居る野田山本等と共に観音参詣すべしとの申入れあり。仍って供米の際知事が観音山で観音に額ずいてその儀式を行って貰いたい希望を述ぶ。	
	11月10日	● 新岩手日報新聞に観音山に因んでチベット宝物の記事出る。安部より湯口へ供米完遂祝に知事を観音山にのぼらせる計画出来たから在山せよと言って来た。行かぬ手紙を書く。丁寧に御文の解を認める。義蔵へ知事の登山を予告する。	
	11月12日	● 安部から神崎氏宛山本氏の手紙一知事観音登山を喜ぶ云々是非登山をと申出られたので二十六日ころ式典挙げるならばと思い安部に打電す。義蔵に右の趣を書面出。	
	11月30日	● 白石の布施七百円高甚布施五百円併せ花巻より為替送金する。十二時仙台発花巻に夕着く。港の梵鐘再鑄の話、観音山知事参拝等種々はなしを聞く。	港の梵鐘 →秋田西船寺の梵鐘

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和23年	11月下旬	★ 経机一脚、仙台市橋本信次郎寄進、畠山勘次郎運搬奉仕	
	11月下旬	★ 本堂上縁板敷工作す。材料畠山藤太郎、勘次郎寄進。高野橋六郎、照井忠太郎、高野橋三右エ門等其他別当勞力奉仕にて成就。	
	12月1日	● 高屋敷百目木を訪問して登山する。冬の山は寒い。	
	12月2日	● 観音堂土間板敷のため六郎氏其他世話人人足多く来る。経蔵を整頓準備する。夜七時安部医師神崎、行方来山、賑わしくなる。及川さん来て手伝ってくれる。夜具は六郎修二郎、周助等より運搬。	
	12月3日	● 正十一時国分謙吉知事、阿部千一副知事、警察隊長野田章、元警察部長山本弥之助、新岩手日報社顧問伊東圭一郎等自動車をつらねて来る。登山され房室に入っのを見愈々実現かと思われた。読経後千手観音の由来を語り、経蔵に案内し釈尊像の由来や三衣一鉢の意義大蔵経の貴重なる所以を説明した。堂にて昼食の宴をはる。折づめ餅一重を呈する。来会者三十余名。新聞記者五六輩や隣村六左エ門、熊谷兄弟も来る。晩は、山本氏持参の塩鮭と一級酒二本で宴を張る。光太郎山口学校祝賀のため不参残念。	この来訪の際、当時の国分知事より山での保管は湿気や山火事などの危険が伴うことの注意を受ける。これを受け、後年谷村貞治により蔵脩館が建設される。
		● 岩手縣知事国分謙吉氏参拝。副知事阿部千一、警察隊長長野田章、縣公安委員伊東圭一郎、前警察部長山本弥之助等、盛岡縣庁より自動車にて山麓に至り登山参拝。これと同時に宮城縣より前総務部長★ 神崎廣、仙台簡易保険局医務課長安倍公男、仙台市会議員行方要等登山参拝す。部落民の心からなる歓迎あり。読経、法話、後経蔵にて經典拝観、三衣一鉢拝観す。境内に三長官記念手植を為す。部落民よりの餐慶を受け、落暮下山。	
	12月4日	● 六郎、徳二郎、勘次郎、忠太郎、徳松来り合わせたので一級酒と塩鮭で喜びの宴を張る皆々満足。午前七時の汽車で安部一行帰仙する。これで祝儀完了した。	
	12月5日	● 忠太郎に託して姉崎に塩鮭上半と御供の小包をして送る。送料書留で何んと五十二円づつである。	
	12月6日	● 高屋敷に行き百ヶ日の読経する。婆さんは花巻に入院したとのこと。花巻に行き泊る。	
	12月7日	● 宮沢政次郎老人来訪、法華経二部寄贈志千円包んで来た。覚蔵に龍樹を与えてくれとたのまれた。帰山。	
	12月8日	● 零下二度、寒さ厳しい。山本弥之助来翰。	
	12月9日	● 円万寺部落御取越金之丈で昼食した。夜義蔵君来宿する。忠太郎登山風呂を焚く。月光風呂にさしこむ。風呂も上加減。	
	12月10日	● 下山して喜代氏宅で昼食上酒に酔う。友治来山、この夜高屋敷の風呂に入る。	
	12月11日	● 金矢岩渕の御取越、午後より小田島医宅にてチベットの話をする。夜泊る。	
	12月12日	● 朝山を目指して帰る。悪路難々々々	
	12月13日	● 南万丁目御取越に行く。悪路難。晩花巻に行く。港（秋田西船寺）から梵鐘の件にて来れと義蔵に來電。多忙の故を以て予代行。	
	12月16日	● 帰花す。秋田にも雪なく珍しい冬である。アティーシャ、ドムトゥン、ゴク訳経官の三像を持参す。経蔵のカギとしてチベットの大鍵も持参す。	アティーシャ、ドムトゥン、ゴク訳経官の三像 →チベット招来の木製の仏像。特にアティーシャ像は、グライ・ラマ13世の手製と伝えられている。
	12月17日	● 縁日なかは登山す。六郎、忠太郎、勘次郎来山。午後渡辺富代氏来山参詣す。豆二拵志。	
	12月18日	● 一番電車で下山、笹間の御取越八軒最後に郵便局長宅となる。	
	12月20日	● 盛岡へ行く。山本弥之助氏へ挨拶し同氏と同行して県庁に赴き警察隊長室で昼食。知事と会見。新岩手日報社に伊東氏を訪ねて不在、小野昌次編集長と会う。七時花巻に帰る。	
	12月21日	● 雨々々町端の法事に行く。	
	12月22日	● 高木平良木友三宅御取越。四息を語る。夜語る。	
	12月23日	● 登山。横屋へ観音堂畳の話をする。夜陰周助氏来訪。鍋倉同行から畳表替たのむ。	
	12月24日	● 下山。高屋敷立寄る。報恩講始まる。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和23年	12月25日	● 秋田十文字慧日寺筑波校長説經に来る。	
	12月27日	● 筑波帰る。本浄寺光輪寺手伝いに来る。雨降る。参詣少なし。	本浄寺 →現・奥州市胆沢区にある願性山本浄寺
	12月28日	● 報恩講演座。	
	12月29日	● 朝登山す。勘氏来り潔除加勢してくれる。	
	12月30日	● 午前十時ころ鍋倉参詣人周助氏引率にて登山本堂参拝経蔵参拝す。三衣一鉢をも示す。庫にて宴張る。忠太郎興を添える。	
	12月31日	<p>● 天気晴朗。高屋敷から阿弥陀尊像入堂する。不動尊も入堂する。供奉の善男善女多く阿弥陀堂に充つ。正信偈を誦す衆人同和し全山に響く。皆々大満足、誰が云うとなく今後御取越を修して貰うなどの希望あり。庵にて入仏の祝宴を張る。六郎、喜代、ドセンカ、矢川、金松、田中、専治、覚蔵、友治、忠太郎、勇五郎、勘次郎、村崎野より藤次郎一本持って登山参拝せしも加わり、鍋倉女人も入りて席を賑わした。及川女酒肴を持参して登山。年越しの祝膳を調理してくれる。暮閉づ。</p> <p>★ 阿弥陀堂入仏式。宮城県白石町専念寺内仏の阿弥陀如来、木造、尺余一、同寺より寄贈。畠山覚蔵同寺より御請けし、今月今日、阿弥陀堂に入仏。部落民一同、正信偈を唱和し、芽出度く入仏の慶祝の儀と終る。</p>	多田等観の紹介で畠山覚蔵が宮城県白石町(現・白石市)の高徳山専念寺から阿弥陀如来立像を勧進した。専念寺は、等観の親戚に当たる寺で、度々訪れていた。
昭和24年	1月	★ 経蔵内書棚作製、材料をとり集め、高野橋六郎、佐々木徳松、畠山勘次郎、照井忠太郎、協力工作す。佐藤政太より特殊援助をうく。	
	1月1日	● あたたか。夜半雨雪が朝になり雨となる。雨参日前よりの残飯でその整理の元朝祝膳である。忠勘両氏も在り。十時宝閑小学校に子供の会に行く。虎とウサギの話をする。祝盃を重ねて悪路帰山。眠る。	
	1月2日	● 雨に悪路を犯かして下山。矢沢比良木に向かう。午後般若心経講賛を始む。友三氏宅に泊まる。佐藤剛気氏も来聴。	
	1月3日	● 心経講賛午前午後両回にて満講とする。	
	1月4日	● 安野御取越を勤める。多田長平に会う。椎茸の話聞く。	
	1月5日	● 雪降る、鍋倉野中にて黒沢尻阿部氏、水沢佐藤氏と会う。雪見酒に大いに酔う。	
	1月6日	● 雪路登山。中根子石神より観音祭り登山あり。重四郎、藤吉世話役なり。虎さんも来る。雪中風呂をたてる。	
	1月7日	● 高村光太郎老を招けども降雪の為め来らず。冬に恐れず。雪に怖れたのか。	
	1月9日	● 雪中を高村光太郎宅に行く。清酒一枡を持って行く。	
	1月10日	● 湯本村金矢へ注射して貰うに行く。昼食を頂く。経蔵棚造りにとりかかる。六郎、金之丈、忠太郎、勘次郎等なり。	
	1月12日	● 経棚落成、経蔵漸く整頓づく。	
	1月13日	● 下山。例に依りて高屋敷に入る。布団を返す。	
	1月14日	● 昼食を喜代氏宅で頂く。花巻に泊まる。	
	1月15日	● 朝七、三〇発花巻を去る。米代二〇〇〇、嘶(講演料か)三〇〇〇、それに高松心経講二〇〇〇を収納。	
	3月	★ 本堂豊表替、阿弥陀堂豊替、金四千弍百五十五圓也。鍋倉観音講中薬百二十把、当部落一同支出、表代金参千六百四十円表七枚分、床四枚金六百三十円床一枚分、刺賃金百二十円一畳分。	
	3月24日	● 仙台発花巻到	
	3月25日	● 照井忠太郎来訪あり、高屋敷に泊まる。	
		★ 庵室用ストーブ一基、金弍千二百五十円也	
	3月29日	● 光徳寺にキリタンボの集りある。盛会。	
	3月31日	● 矢沢村島部落小学校で虎と兎の話をする。寺で観音経の話、夜は素一宅に五六輩集る。	
4月1日	● 午後安野多田佐平方葬式。		
4月2日	● 久し振りで山に登る。		

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

多田等親の花巻における足跡 — 日記、『観音堂記録』、書簡から — (2)

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和24年	4月3日	● 昨晚周助来観音文庫に就き話す。龍樹を寄託す。高屋敷へ二宮座托を貸す。暁前、山麓、農家、火烧。高松熊谷一族の観音参り来る。十余人参る。	
	4月5日	● 花巻に葬式あり徒歩下山。鳥へ土産持参する。まん福にて法事。	
	4月6日	● 宮沢政次郎に行く。昼食そば。	
	4月7日	● 金矢小田島医者に眼の相談に行く。昼食を頂く。雨路を登山する。	
	4月9日	● 矢沢同行の法華経写真を光徳寺太子宝前でする。熊谷兄弟佐藤剛気、多田佐、五時三十分発黒沢尻に赴く。及川女史同行、新穀丁阿部清次郎宅を訪問。餐応を受け、その夜は二階に泊まる。瓢に白酒を入れる。	新穀丁 →現、北上市新穀町
	4月10日	● 及川女史と同行、自転車にて帰花。勘次郎氏息子昨日死去せりと弔問す。不在中、渡辺女史来訪ありしと玉子、佃煮、せんべい、砂糖等恵まる。阿部医者大阪神崎随行の次第通知ある。	
	4月11日	● 山口久左エ門の保管大蔵経中大般若経八千頌金泥経とデルゲ版一箱ととりわけ、他日観音山持ち運びして貰うこととした。光太郎氏電灯点した。瓢を携えて黒沢尻の酒を盗についだ。六左エ門死を弔問する。帰庵したら金之丈から餅ニタ重届く。	
	4月12日	● 観音山の掃除一下円膝当番	
	4月15日	● 観音山例祭	
		★ 湯口村日清日露満州支那事変大東亜戦争戦没慰霊祭を行う。主催同胞援護会、清水寺、常楽寺、延命寺、光徳寺出仕。先ず観音例祭法要を修し、後慰霊の読経を行い、法語説教を為す。参詣遺族二百に余る。この日観音縁日に加えて火防未を行われたるにより、全山人を以てうめられる。盛儀なり。観音堂南側に供養塔を建つ。桜羽場先生筆頭、塔は高野橋六郎寄進。	
	4月15日	★ 阿弥陀堂〇〇一、價金七百七十円也。サシ渡七寸上円膝、八幡、女人講有志寄進。	
	4月20日	● 観音診療班入村。太田村に行く。	
	4月21日	● 診療班一行と鉛温泉に入湯。	
	4月25日	● 湯本八重樫覚兵エ、そば食いに行く。	
	4月27日	● 山上花見の宴。藤太郎夫婦、六郎、勘次郎、忠太郎、金之丈、三九郎等。	
	4月28日	● 下山。	
	4月30日	● 朝出発	
	6月26日	★ 梵鐘鑄造に関する会議を開く。豊沢・大沢・下シ沢・神明・根岸・志戸平・橋本・一本杉・西晴山・上根子・古館・中根子・南中根子及び二ツ堰・中村・八幡・上円膝・下円膝・鍋倉緒部落の代表者二十七名参集す。桜羽場先生坐長席に座り左の要領を決議す。 一、戦亡英霊のため観音山に、梵鐘を鑄造すること。 二、全村一致し協力して実践すること。 三、予算十五万円也、鑄造に関しては多田等親に依頼すること。	
	7月5日	● 勘次郎梵鐘十五万円寄付集る見込みの葉書ある。	
	7月17日	● 川田瑞穂訪問梵鐘銘稿示された。意見を述べ辞去する。	
	7月31日	● 吉武を訪問、観音堂の梵鐘銘川田老人撰文を示された。	
	8月	★ 等親登山の際には既に鍋倉部落各区の寄附納付あり。上円膝、上根子土区、歳之神、新田等続々寄附到来。八月末日まで六万円余に達した、一方京都高橋鐘声堂才治郎へ、梵鐘尺二尺五寸、新鑄方注文した。川田瑞穂氏には撰文、鈴木吉武氏には揮毫を依頼し、同十二月鑄造完成の通知を得た。而して同廿五年二月、花巻駅到着するに至ったのである。それより照井忠太郎は専ら募縁に努めたことは衆知の事実で、村内は云うに及ばず村外湯本、太田、花巻西郊緒部落を始め、遠く矢沢方面にまで歩を転し多額の寄附を得た。	
	8月9日	● 徳沢と共に八時五十分発上りにて岩手に向かう。五時過ぎ高屋敷に着、その夜泊まる。	
	8月10日	● 徳沢氏を観音山に案内する。染滝に飛び込んで喜ぶ。	
		★ 経机、姥杉材にて製作。工師、照井巳喜奉仕。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和24年	8月11日	● 旧七月十七日、縁日四時ころから神楽始まる。盆躍りも始まる。徳沢氏喜んで観覧した。予忠太郎禁酒した。	
	8月12日	● 徳沢下山帰京	
	8月13日	● 花巻上町の少年登山義蔵引率する。	
	8月14日	● 黒沢尻阿部、八重樫、(横川目中学校先生)等三人連れを及川女史案内して来る。上円藤の婦人講、戦没者御慰参詣ある。	
	8月15日	● 光徳寺太子堂の新築墨引祝ある。参列する。晩帰る。	
	8月16日	● 鎌倉玄悦同級生林間学校で来る。高校の植原教員来訪泊まり翌朝早く下山する。	
	8月17日	● 渡辺女史来山、鈴木吉武学匠から鐘銘の清書届く。	鈴木吉武 →書家。中国に留学していた時に等観と知り合った。
	8月18日	● 金矢小田島氏を訪問、昼食をいただく。後花巻に赴く。下円藤の少年隊キャンプ七名来る。	
	8月19日	● 高松熊谷四人同行参詣。湯口出羽参り同行の酒盛りある。	
	8月20日	● 突然阿部氏来湯忠太郎全快を祝福のためなり。夜会後登山宿泊。	
	8月21日	● 高屋敷診療、忠太郎方泊まる。	
	8月22日	● 安部氏も高屋敷法事に臨む。その晩帰仙する。千枝子観音山に来る。	
	8月23日	● 鈴木吉武より鐘銘清書到来。法隆寺へ太子堂額字揮毫依頼する。善右エ門梵鐘寄附金持参す。	
	8月24日	● 千枝子勘次郎氏と鉛温泉に行く。北浦甫君来山一庵賑わう。	
	8月25日	● 雨を犯して盛岡の団体登山。	
	8月26日	● 及川青年来る、昼食の用意して、朋友不来。	
	8月27日	● 北村二時四十分花巻発帰京。忠太郎餅をつき高屋敷餡瓶を作って来る。千枝子と共に光徳寺に入る。新聞記者倶楽部に太子堂を説明する。	
	8月28日	● 千枝子帰る途中仙台立ち寄り予定。予は水沢へ行く。	
	8月30日	● 盛岡へ行く。四郎宅立ち寄り。二十人鍋の約束する。山本弥之助訪問する。知事不在野田に挨拶する。佐々木宏宅夕食して帰る。	
	8月31日	● 午後帰仙。	
	9月1日	● 昨夕ころより大暴風雨、一睡すら出来ない。小障子風で破れる。書庫にも雨が入る。ここで初めて会う大風。山頂の吾が庵飛ばされそうである。薪小屋の屋根飛ばされる。	
	9月2日	● 観音参数多現来る。梵鐘寄附今日迄凡そ六万円になる。ユリの山上に六万円が集まるだけでも不思議。	
	9月3日	● 伊三郎上根子上の寄附金壹万千八百円持参、大いに感激する。桜羽場秀三先生登山。今後の寄附及び鐘樓鐘初式等につき相談。晴れて月よろし。	
	9月9日	● 大蔵会。忠太郎と鍋倉祭に三九郎へ行く。歳の神に転じてとまる。両家で鹿踊りを見る。	
	9月10日	● 大蔵会。この夜寺泊。	
	9月11日	● 高屋敷を訪問する。阿弥陀堂修繕のことを依頼する。三平の仕事。山へ戻る。	
	9月12日	● 下山する。光徳寺立柱式。奉新建大慈救世聖徳皇太子堂のむな板を書く。式後本堂に酒もり。宮沢政次郎から俱法本二冊貰う。	
	9月13日	● 仙台に向かう。	
	12月26日	● 花巻に赴く。翌日治療。	今回も一燈庵で年を越そうと花巻を訪問しているが、東京を出発したときから風邪気味で、花巻に到着後も具合の悪い様子である。
	12月28日	● 寒気を犯して登山、御取越。高屋敷阿弥陀如来修理して成る。¥500かかると。関場氏の戸張、打敷を以て荘厳する。 ★ 阿弥陀堂御本尊蓮台修繕。畠山覚蔵発願。経費金五百五十円也。阿弥陀堂、打敷一枚。同氏寄進。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

多田等観の花巻における足跡 — 日記、『観音堂記録』、書簡から — (2)

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和24年	12月28日	★ 観音堂、阿弥陀堂、両堂御戸張。金襴地、観音堂前卓打敷、縮緬刺繡入一領。阿弥陀堂、打敷、紺地、花模様、橋本松十寄進。右寄進人、仙台市元鍛冶丁閑場テイ。	
	12月28日	★ 阿弥陀堂、御取越、奉修。白石町専念寺徳力祐憲、積雪をふみわけて参拝。	
	12月28日	★ 観音堂前卓、大花瓶真鍮、サシ渡七寸、一對。寄進人、湯口村収入役、高橋周助。	
	12月31日	● 年越しの祝に六郎、忠太郎、勇五郎、金之丈等来る。後に及川女史、周助登山。大馳走である。加減よろしからず。	
昭和25年	1月1日	● 朝勤行する。終日眠る。下痢、せき多少風邪の気味。	
	1月2日	● 昼頃勘次郎誘導して張銘忠、馬廣秀雪をふみしめて登山、昼食後下山。鉛温泉に行き帰京の途に就く。MJB、パン、アメの土産。	
	1月3日	● 及川女史の心尽くしの看病で汗全部出る。	
	1月4日	● 忠太郎氏の馬そりにのって下山。花巻にて辞養、三又医者来診あり。	
	1月12日	● 高屋敷にて老人と対談。一泊。	
	1月13日	● 一月十三日より報恩講。十六日満座。楯玄秀説教。この報恩講より幻燈を以て布教。	
	1月25日	▲ 多田等観→照井忠太郎 本日エルビー注射薬三ヶ貴家送るよう手配しました。そのうち一箱は島山覚蔵氏に一箱は島山勘次郎氏より依頼をうけし故□□□□若し御不要の□貴賓家で御□□下される□□御保管なさいませう宜敷願います。代金一箱二百円です。御大切に。右エルビーは効能書に説いてあるように顕著の実績あるものです。	
	2月8日	▲ 多田等観→照井忠太郎 御きげんいかがです。エルビー三函の代金届きました。十二箱送ります 今後忠太郎さん一家が代理店になってください。一箱につき三十円引きにすることに相談いたしております。代金はうりたてすみ次第送金願います。売値引くことは他に言わないで、二百円ずつうって下さい。多くの人に御せんで下さい。つりがねは出来上がりました。大万歳です。今に花巻に現れましょう。動物園長さんなどもエルビーを注射して丈夫になりなさい。	等観が訪れた頃には既に円万寺観音堂の梵鐘は失われていた。等観が梵鐘の鑄造を企画し、地域住民の賛同を得ることができたので、京都の鐘声堂に依頼していた。この手紙は依頼していた梵鐘が、花巻に到着する直前のものと思われる。
	2月12日	▲ 照井忠太郎→多田等観 拝復 御紙面有難御礼申上候 陳者御送付の薬本月十日に受取仕候 薬は即時に売却致し難く左様御承知被下度候 次に梵鐘は出来て結構です 有難御礼申上候 梵鐘の事に付本月十日に観音山にて寄附金に付相談申候 櫻羽場先生を始め各部落より(円万寺膝立)相い集りて相談しました 先寄附金を貰いたる金額(二ツ堰ヨリ金八千四百五十円 下円膝ヨリ七千円以上)此の外トヨ沢八まん二部落ヨリ一万円は未納なれ共全く確実に候 全々未納部落は七部落ヨリ二万円相致し居候 現金十二万円七部落の予相入れて十四万円相成候 全く先生の之大なる力にて候 小生是ヨリ花巻新田小七セ川方面に参ります。湯本の金矢面に近頃行ます 甚だ読みにくいけれ共御判断願申候 御返事方々御報まで	トヨ沢八まん →豊沢、八幡 小セ川 →小瀬川
2月16日	▲ 照井忠太郎→多田等観 拝復 此之間の薬書有難御礼申上候 陳者薬の件小生も旧正月にかけて宣伝仕可候 少々お待ち被下度候 尚愚孫の結果も宜敷御座候此の事も厚く御礼申上候 注射の一手販売の手続御案内被下度候 次に梵鐘の寄附金は大きに宜敷今度は神明部落よりは久保田万次郎外中村林次郎と二名にて二月十三日の夕方金二千三百十円を小生宅に被下候 右の方にお酒やら御飯を上げて帰し候 尚又熊の部落よりは金六千三百五十円を平賀昇氏は小生の不在中に二月十五日に有難頂戴致候 尚不しんな部落より近日中に出来るものと信じ居候先は御返事勞御報迄 時節柄御身御大切に 小生も無事で旧の年越を向ます 又貰た時は御知らせ申します	熊の部落 →熊野部落	

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和25年	2月22日	▲ 照井忠太郎→多田等親 謹啓 一寸御報知申上候 扱寄附金の状況申上候 金矢に参り金参千二百五十円頂き候 其の内様は小田島医者様ヨリ金壹千円 次岩瀨氏ヨリ五百円頂き 外 七八名よりは一千七百五十円頂候 之も先生の力と思ひ居候 次 太田村の阿部藤次郎様ヨリは金五百円頂き候 之は旧正月二日に光徳寺にて頂き候 尚八万部落五千五百円 次 下シ沢二千三百円旧正月四日前に都合一万円以上と相成候 小生金矢に行時小セ川部落に三か所に寄付帳依頼致候 之も少く共一、二千円あてにして居り候 梵鐘に本日廿二日頃に光徳寺様は満金送金すると思ひ居候 勘次郎氏廿一日に右御寺様に持参致たと思ひ居候 又しんな部落に参りてお願申可其ノ手配致居候 旧正月七日には鐘樓堂建立の相談致可候 注射薬は二箱売りました 小2の孫もなおりて通学して居ます 先は御無事で	
	3月	★ 観音堂代表者会議を開き、堂宇新築に就きての諸問題を討議した。建築資材は中村部落、高野橋清次郎、高野橋三右衛門、畠山勘次郎、照井忠太郎等より献材を得、棟梁の佐藤末蔵、同息義美、高野橋六郎等で、屋根職は藤原末太奉仕し、四月八日立식을挙げるを得た。	
	3月28日	● 専念寺より鐘供養の尊像入袋千枚寄贈。高甚から紙一メそれぞれ観音山に寄与。	
	3月31日	● 九時半白石発、花巻四時到着	
	4月1日	● 光徳寺、逗留。	
	春	★ 植樹 菩提樹一、名須川勇高。木蓮樹一、高野橋六次郎。甘露梅六、照井勇五郎。	
	4月2日	● 高屋敷を経て山に登る。鐘樓屋根既に出来上がるに驚く。	
	4月3日	● 観音詣で二組参る。	
	4月4日	● 部落世話人、撞き初め相談あり桜羽場秀三老も臨席、六郎氏木蓮樹阿弥陀堂側に植樹。	
	4月5日	● 金矢、小田島訪問礼辞を述ぶ。	
	4月7日	● 斎藤三五郎宅を訪問一栄子氏の宅である。後、登山した。	
	4月8日	● 中村部落から人足来り。土台石を基地に運びあげ4時過ぎ、立柱にとりかかる。遂に落暮完成。思った立柱式ができた。忠太郎供餅をする。名須川勇市、菩提樹を植樹。	
	4月9日	● 下円藤山掃除、表面参道口に手洗水を作る。及川宅にひげそりに行く。	
	4月10日	● 鐘を奉迎する。光徳寺より、照井寅吉の馬車で一本杉まで曳いて来る。それから信者の牽く綱一丁、余一時に登山。直ちに鐘を堂にかけ奉る。 ★ 花巻光徳寺に仮安置せる梵鐘を観音山に移し迎えた。世話人高野橋六郎、畠山勘次郎、照井忠太郎等出迎え、上根子新田の照井寅吉が馬車にのせ光徳寺を出発。一本杉より多数の遺族信徒の索く縄にひかれ正午、山麓第一鳥居に到着。それから土そりに移し直ちに山上鐘樓にひきあげ。堂宇に奉懸りしたのは午後一時半であった。	
	4月12日	● 大正新修大蔵百巻を光徳寺の太鼓樓に奉安。午後宮沢政次郎を訪問。明治バター二つ頂く。	
	4月14日	● 登山。ブリキ屋、鐘樓の屋根はりに来る。義蔵、スタンフォード大学の手紙を持って登山。	
	4月15日	● 上円藤学児植樹する。照井勇五郎、梅六本植樹する。新しい布団に寝る。	
	4月16日	● 徳力祐憲夜七時ころ一家全員登山。驚いた。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和25年	4月17日	<p>● 撞きそめの日。先ず朝風呂に沐浴する。徳力児女皆喜ぶ。牛乳瓶に野花を採りて阿弥陀観音に供える志ゆかしかった。午後一時本堂で読経。妙延寺住職藤本正道先請伽陀。それから観音偈、次に光徳寺義蔵、村陣亡者の名を読み上げ、表白文を誦し回向。行道して鐘楼に至り撞きそめ、挨拶。祝詞終りて第一声を撞く。我人みな感激に涙をたたえた。第二声は六郎、第三声は忠太郎に撞かせた。寄附者には浅草観音の御影を記念した。阿部健一郎、熊谷長左エ門の二人、祝宴に移る。全山人の山、人みな喜ぶ、鐘が鳴る。豊沢部落から大念佛一剣舞も来て踊る。神楽もある。開山以来の盛況。よい鐘の音、人みな喜ぶ。寄附金十八万円余。</p>	
	4月17日	<p>★ 梵鐘撞きそめ。慶讃法要及び陣亡将士慰霊法要を修す。午後一時導師等観三蔵、清水観音賢龍、専念寺祐憲、光徳寺義蔵、延妙寺正道、延命寺秀三出勤。田中善成、渡辺富代の優婆塞、随喜出仕した。法要後本堂より庭儀行道散華し、西南隅丘上の鐘楼に登り、右回りで三周した。等観の挨拶、湯口村代表阿部健一郎、来賓熊谷長左衛門の祝詞あり。終わりで等観壇上に立ち厳かに一鐘を行った。参列者一同合掌し深い感激にうたれた。高野橋六郎、照井忠太郎、遺族会長が続いて撞きそめを行い、十方法界に尊い音波を送った。梵音の深遠に響く裡に祝宴に移る。同山人を以てうづめられた。盛況を呈した。此日、豊沢部落特有の豊沢大念仏剣舞(四十名)、観音神楽(円万寺神楽)の余興があった。</p>	
	4月17日	<p>★ 阿弥陀堂経卓一、佐々木徳松寄進。</p>	
	4月18日	<p>● 徳力一族下山。光徳寺より三衣一鉢の宝物を白石太子堂に移す。</p>	
	4月19日	<p>● 勇五郎六十二才の祝をする。予と光徳寺も招かれた。</p>	
	4月20日	<p>● 鎌倉林助宅に招かれた周助新田奥左エ門に導かれて行く。及川喜志同行山にとまる。</p>	
	4月21日	<p>● 妙延寺の藤本住職を訪問する約束なりしも、雨のため止。</p>	
	4月22日	<p>● よく晴れた。下山して太子まつりに列席する。舞台上に神楽手踊ある。盛大、安部医者一行参拝。太子宝蔵2000の志を寄せる。</p>	
	4月23日	<p>● 梵鐘の決算報告をさせた。それがため登山。六郎、横屋、忠太郎、徳松、覚蔵等登山。残金壹万円を確保させた。桜羽場秀三氏に挨拶のため六郎、忠太郎を引き具して行く。焼酎一升持参。藤吉宅に地藏さんの祭に招かれた。記毫する。</p>	
	4月24日	<p>● 花巻地区警察でジャコウ猫の話、チベット人の文化宝を自覚する話。我に宝あり、聖徳太子の話等をする。正午、宮沢政次郎に招かれた。佐藤氏等同席。</p>	
	4月25日	<p>● 山本弥之助を訪問。奉讃会盛岡世話人をたのむ。県庁へ行ったが知事は出張、隊長は転住で会えなかった。佐々木宏宅にひまを休み、川村正一郎宅を訪問。夜の法座をする。太子一百円札一ワルナー博士と太子をする。</p>	
		<p>★ 朝夕梵鐘撞き励行、昭和二五年四月廿五日より。朝夕鐘撞きを行事として行う。毎朝撞き人 名須川藤右エ門、毎夕撞き人 照井忠太郎。</p>	
	4月26日	<p>● 十一時に花巻発白石に赴く。</p>	
	4月29日	<p>▲ 照井忠太郎→多田等観 前略御免被下度 扱先生様の出立には見送もせず申訳之無候 又帰宅の際は尊き観音様のお掛御頂き実には難御礼申上候 一寸お伺申上候 四月廿七日安部一行帰る時花巻駅にて矢沢熊谷友義氏を通して南万丁目神山弥太郎様梵鐘に金二百円寄附 友義の妻の弟なり此金を畠山勘次郎氏に渡すべきかお伺上候 次に小生 注射薬 湯口佐々木梯一郎に進上致候 小近頃胡マ少々御送り申上候 お待被下度候 先は御礼方々御報告</p>	
8月8日	<p>● 一時七分発花巻に向かう。仙台七夕を駅構内で見えて十一日からの大催しを予想だけする。車中暑さ甚だしく、花巻へ着いたらそれ以上。</p>		
8月9日	<p>● 登山、忠太郎、勘次郎来る。鐘が鳴る。々々。</p>		

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和25年	8月10日	● 高橋周助氏来る。散華会に誘われた。周助氏から蚊帳を借りる。諸方から茄子集まる。観音参りも来る。	
	8月11日	● 黒沢尻八重樫君、横手高校生五名引率して来る。昨晚桜町の賢治碑に露宿したという。山口の高村光太郎氏を訪ねて来る。酒一升持参。及川アサヨ先生明日昼食までの炊事万端の世話して帰る。	
	8月12日	● 早朝彼等下山、予もまた下る。似内の忌明に行く。義蔵秋田盆手伝いに今朝向かう。暑さに劳れる。宮沢氏宅を訪問した。一家喜んで迎えてくれる。	
	8月13日	● 登山。暑い山に登ると涼しい。	
	8月14日	● 在山。八幡上円藤の女人講入浴に来る。餅甘酒など持参。終日休養して去る。小学生十名宿泊。夏季生活して去る。	
	8月15日	● 一時ころ石原莞爾氏一周忌に相当。黒沢尻阿部清次郎、佐藤剛、佐藤素一三人来山。観音読経、経供養梵鐘を撞いて持参の一升を飲んで去る。アサヨ女史も参加。晩喜志トマト六ヶ持参。莞爾供養のためという。	
	8月16日	● 蓮久寺来山す。熊谷長氏来信。知事夫人一行参拝交渉の件、廿七八九の何れでもよき旨返事す。	蓮久寺 →奥州市江刺区岩谷堂
	8月17日	● 白石団体が来る日なので勘次郎氏駅出迎え、忠太郎は風呂をたてる。遅れて延引のがき来る。六郎氏も酒に重箱持参。落暮平らげて帰る。暑い、湯口婦人会の大運動会あった由。	
	8月19日	● 花巻町葬式、その晩泊まる。昇君飛脚、千枝子、明子登山を報し来る。	昇君 →照井昇。照井忠太郎子息。
	8月20日	● 忌明けして干天を帰山。千枝子・明子気嫌で居る。忠太郎氏薪割りして居る。	
		★ 観音堂前卓打敷一、仙台市定禅寺横丁一三 橋本まつ。	
	8月21日	● また下山横川日葬式に行く。この日山掃除、知事夫人等不参に決定。	
	8月22日	● 早朝帰山、終日千枝子・明子と語る。忠太郎、植原中学先生来る。兩人か帰山して花巻赴く。	等観の元を訪れていた等観の三女明子と四女千枝子が帰宅。明子と千枝子からこの訪問について感謝を述べる書簡が、忠太郎に届いている。
	8月23日	● 千枝子・明子花巻在留の予定、明日帰途。	
	8月24日	● 涼しい一日、金矢小田鳥氏見舞に行く。ビール二本馳走になって帰る。歳の神へ立ち寄る。及川三兄弟来る。	
	8月27日	● 昨日は旧盆十三日、高屋敷勘之丞盆経に行く。今日は金之丞、忠太郎、勇五郎へ読経。勇五郎方にて朝食。縁日をこの日に移す。橋本まつ、関場テイの両女士登山。昨夜仙台出発の由、本堂に打敷帯地直しの寄進ある。予に下帯二本与えられたのを忠太郎親子に譲渡した。いろいろ雑談、三時法要後庵室で餐宴ある。櫻羽場秀三老師来席、雨中神楽奉納ある。追加の注文ある。両老夫人大喜び。雨を犯して昇君布団運ぶ。勘次郎姿見え。この夜泊る。	
	8月28日	● 朝四時半昇君登山、両客人にクルミ餅を餐応。大喜び。残りを持ち帰るといふ次第。米二升、餅供四枚、二升餅などみやげに下山。伴に二ツ堰まで行き、花巻で別れる。本堂の読経、檀家廻って経を読む。	
	8月29日	● 前日の通り経を読み廻る。正午に下根子に法事ある。	
	8月30日	● 湯本慰霊祭松山寺に赴く。昼食後、岩淵家に立ち寄り、老人と登山す。照井忠太郎、名須川藤エ門夫婦の鐘撞慰安の宴が六郎主催で張られた。下円藤の婆さん達多く来席にぎやかだった。	
	8月31日	● 六郎登山。米吉と共に朝の宴で残酒を平らぐ。障子を張る。	
	9月1日	● 今日から光徳寺大蔵会。	
	9月2日	● 大蔵会后森腰葬式。それから歩いて鍋倉高橋周助方に赴き婦人会に話をする。観音経序の話。	
	9月3日	● 大蔵会最終の日。	
	9月4日	● 徳蔵と高屋敷の法事。山泊する。高屋敷で酔う。	
	9月5日	● 義蔵、秋田大蔵会に赴く。傳助葬式に行く。経谷芳隆登山する。徳次郎忠太郎等参集。梵鐘謝恩の一夕を催す。	経谷芳隆 →多田等観義弟

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

多田等観の花巻における足跡 — 日記、『観音堂記録』、書簡から — (2)

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和25年	9月6日	● 下山。経谷、帰洛する。	
	9月9日	● 藤次郎に行く。法事である。彼庵から一直線で帰山する。夕、三九郎から招かれる。鍋倉祭のためである。	
	9月10日	● 周助早朝登山。祭餅を餐ぜんがため招き来たのである。忠太郎勘次郎仁翁来庵。終日語りて去る。	
	9月11日	● 島正母死亡の知らせに若者二人来山せり。下山、宅前から自動車で廣隆寺に赴き、葬式に列す。忌明けの供養をも受く。	(藤興山) 廣隆寺 →花巻市四日町にある浄土宗の寺院。
	9月12日	● 帰山。風呂をたてて紫波町の同行、待つが来なかった。	
	9月13日	● 忠太郎法事母十七回忌。佐野も来る。帰山せず。高屋敷に挨拶して町に出る。夜は島家にて一族と会食。	
	9月14日	● 七時二十分花巻出発一五〇〇〇寄付ある。	
	10月7日	多田等観→照井昇 ▲ 父上の御病気重き由遙に御心配いたしております。既に仙台の安倍先生とも相談いたし何等御沙汰ありし事と存じております。当方にも病人あり早速御見舞参上いたしかね御無礼しております。重々御大事に遊ばされ度。	
	10月18日	● 花巻に赴く。	昭和25年10月10日に釜石線が開通したのを記念して「花巻振興博覧会」が10月25日から10日間、花巻小学校、花巻中学校、光徳寺を会場にして開催された。このイベントで、チベット請来品を公開するために花巻を訪れた。
	10月19日	● 一本杉病院入院の照井忠太郎を見舞い。六次郎、高屋敷を訪問。花巻に帰る。志戸平葬式。	
	10月21日	● 藤吉、地主を引率して秋田に行く。チベット請来品悉皆荷造りして発送す、これにて自満福智蔵に西蔵品なし。	
	10月22日	● 土崎発横手を経て黒沢沢に出て西条氏宅や阿部君宅を訪問して餐應に預かる。	
	10月24日	● 白石の徳力来る。観音山の宝物を移す。	
	10月25日	● 花巻振興博覧会の幕がひらかれる。	
	10月27日	● 弓道会の連中來覧まん福にて餐宴あり。谷村貞治と会う。彼夫婦今回の展覧を大いに意義あるものと考えているらしい。	谷村貞治 →1896～1968。東京蒲田に新興製作所を設立し、戦後は花巻に移転。漢字テレプリンターを發明し、新聞報道の機械化を実現した。参議院議員や自由民主党県連会長などを歴任。 谷村は等観が渡米したのち、昭和26年(1951)にチベット招来資料の保管のため、自費で広徳寺境内に蔵脩館を新設した。
	10月31日	● 安部公男・清野・渡辺は忠太郎見舞いのため來花。直ちに一本杉病院に入る。忠太郎・昇は涙。雨の中を登山した。一族夜具布団を運ぶ、由は風呂を炊く。乾三は炭と刺身持参、高橋周助・桜羽場秀三、清酒一升持参。急に賑わう。	
	11月1日	● 早朝六郎一升持参。藤右エ門鐘叩き、先生加わり朝の饗宴始まる。友治・善兵ヱも馳走して登山。十時ころ安部帰仙の途に就く。	
	11月3日	● 博覧会も幕落ちた。光徳寺展は大評判。谷村夫人来訪。表装料三千円持参した。	
	11月4日	● 宝物を整頓して帰京。旅費一万円と谷村の志を頂く。林檎と餅沢山、小豆等の重き荷物を背にて仙台駅に下車した。洋服の紳士がリュックサックで往復する者ないので少しく恥づかしい。	
	11月23日	多田等観→照井昇 ▲ 寒さに向かってきました。御父上は快復に向っているよう直筆のお便りをいただきうれしく思っています。精々御大事に。さて次に今春エルビー注射薬代金で御保管願っている金で林檎一箱送って頂けないでしょうか。御願申上げます。宛先の駅名は房総西線姉ヶ崎駅です。	

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

和 暦	月 日	内 容	備 考
昭和26年	4月8日	● 花巻に向かう。	
	4月9日	● 花巻新興製作所で協議。 <u>まん福</u> でのむ。	まん福 →昭和10年(1935)花巻中心市街地の吹張りに建築され、花巻の老舗料亭として繁盛し、政財界人の迎賓や情報交換などにも利用された。
	4月10日	● <u>鈴木兄弟</u> 来花。直ちに花巻温泉同行する。	鈴木兄弟 →鈴木吉康：光徳寺の蔵脩館を建設。渡米の身元保証人にもなっている。 鈴木吉武：観音山梵鐘の記毫をしている。
	4月11日	● 花巻現地視察。諸所交渉後、志戸平に去る。同夜光徳寺にて会議。秀次・伊藤祐武美も来る。寺内建設の事に決して去る。	円万寺観音山に移設した郷倉内のチベット招来資料を保管する庫を、光徳寺境内に建設することが決定。
	4月12日	● 休養。忠太郎来る。書を与える。	
	4月13日	● 土崎墓参り	
	4月16日	● 帰花。	
	4月17日	● 東京より来電あり。朝三時発、離花。	
	5月1日	● 文子と上野で落ち合い、花巻行きを決行。急行で向かう。常磐線九時半発、久しぶりで海岸を通る。七時花巻に着。	
	5月2日	● 山に赴く。忠太郎息子、布団運ぶ。周助一升持参。	
	5月3日	● 観音さんの送別会。幹三はじめて来る。周助、六郎、徳次郎、高屋敷、喜よ、友治、アサヨ、三九郎、勘次郎、忠太郎、徳松勇五郎、善兵衛、藤工門来参、各々から餞別二百ずつ貰う。盛宴であった。藤吉、蔵外荷造りして三ヶ下山。午後名残おしくも下山。宝物保存会結成。規則書できる。	
	5月4日	● 山本弥之助市議、盛岡行き。齋藤出納長、新岩手工藤、伊東圭老、田中警察隊長、川村、柴田等とグリルで洋食。送別会後、国分知事、阿部副知事に挨拶。夜は花巻まん福で川村勝政の送別の酒。	
	5月5日	● 宮沢政次郎と谷村貞治に挨拶してから、十時の急行で花巻を出発。	
	5月17日	照井忠太郎→多田等観 謹啓 当地御出発の際はお粗末ばかり申し上げ御失礼致しました。お許下さい。御出発の時は息息に多大なるお恵み被下お礼の言葉も御座いません。有難う御座います。五月十六日に広徳寺様は藤吉連れ来り、観音山よりお経を運びました。義弘動物園も手伝いました。 ▲ 全月十八日は先生様の御所望次第巳喜大工をお寺に箱製らえに行きます。今月もあと十二、三日にて六月に入ります。愈々渡米に接近しました。何卒御身体を丈夫に致して御渡海の程お願申します。小生も先生のためにお観音様に誓い梵鐘を撞きます。御失礼ですが六月の何日に船にのる事をお知らせ願います。御無事で御帰国の日を待て居ます。	義弘動物園 →忠太郎の子息、義弘のこと。山羊や鶏など様々な動物を飼育していたので、等観は義弘動物園と呼んでいた。
	5月24日	多田等観→照井忠太郎 ▲ 田植そろそろ始まって来たことでしょうか。京都、奈良、大阪を経て伊勢へ来ました。大神宮にと参りました。皆様お大事に	
	6月22日	照井忠太郎→多田等観 謹啓 長い間かかって鉄鉢や衣入れるお箱しっかり製作しました。お粗末には出来たけれ共何卒御安心下さい。六月廿日に広徳寺にお渡しました。先生全月廿一日は旧五月十七日で観音さまの御えん日です。櫻羽場や周助が来山しました。先生のご出帆の日を待って居ますから何卒お知らせ下さい。御出帆の日には梵鐘を撞き先生の冥福を祈りたいとの事、何卒御案内下され度、先は御身御大切に。	等観は、この年の6月30日に横浜港を出発し、翌7月12日にサンフランシスコに到着した。

● = 日記 ★ = 観音堂記録 ▲ = 手紙

2023年における花巻空襲に関する調査の進展について

花巻市役所 布 臺 一 郎

1 はじめに

筆者は2021（令和3）年3月発行の花巻市博物館研究紀要第16号において、「2020年における花巻空襲に関する調査の進展について」と題する報告を行った。その報告では、1945（昭和20）年8月10日の花巻空襲で犠牲となった台湾出身の外科医「さい」先生とその最期まで同行していた同じく台湾出身の中山先生こと劉宗幹医師についてその足跡をたどったが、その後調査は遅々として進まない状況が続いた。筆者はこれまで、インターネット上で公開されている各種データベースを主軸とする方法で調査を進めてきたが、2022（令和4）年12月、筆者が頻繁に利用してきた国立国会図書館デジタルコレクションが全面的にリニューアルされ、全文検索可能なデジタル化資料が増加するとともに、閲覧画面が改善されることとなった。更にこれまでは国会図書館か国会図書館と連携している図書館（近隣では岩手県立図書館）でしか印刷出力できない環境が改善され、自宅からのアクセスで資料の印刷出力ができることとなり、調査環境が格段に向上した。このことによって、進んでいなかった花巻空襲調査にもいくつか進展が見られたので、今回、そのことを報告するものである。

2 「さい」先生の漢字表記について

上述の花巻市博物館研究紀要第16号において、筆者は「さい」先生の漢字表記には諸説あり、台湾出身者としては「蔡」の可能性が高いと推測したものの、確定には至らなかったため「さい」先生と表示した。しかし、2022（令和4）年8月、えふえむ花巻株式会社記者の横島正紀氏より、市内在住の藤原やちよ氏が2013年に出版した「山村に育って 八十九年の足あと」の原稿を入手することができた。筆者はかねてより横島氏に「さい」先生の消息を探していることを伝えており、藤原やちよ氏の家族関係者から偶々入手したこの原稿の重要性に気づき、そのコピーを提供してくれたものである。なお、その提供日は奇しくも花巻空襲の日8月10日であったことを付記しておく。さて、筆者は藤原やちよ氏のこの著書については既に読んでいたが、著書の中では「斎」先生と記述されており、このことも「さい」先生の漢字表記の諸説の一つと認識していた。しかし、この原稿において藤原やちよ氏は「あの日は土曜日（ママ）で仕事は午前中で石鳥谷から内科の中山先生と外科の蔡先生綺麗な女の先生で二人共台湾から来ている先生であの日は土曜日（ママ）で病院は午前中で12時の列車に乗る為に花巻駅で空襲に

合い松葉林に逃げた処を敵に狙われ蔡先生が亡くなりました」と記している。(写真1) 藤原やちよ氏は中山先生と「さい」先生の同僚の看護師だったことから、原稿に書かれている「蔡」先生こそが正しい漢字表記であり、出版物になる段階で「斎」の字に変わったことが確認できた。よって今後は「さい」先生を「蔡」先生と表記する。(※筆者注 「ママ」としたのは実際には金曜日であったからである。)

3 劉宗幹医師のその後について

さて、蔡先生と同行していた劉宗幹医師について、筆者は前回の報告で、「少なくとも1956（昭和31）年まで石鳥谷町で 開業医を務め、その後1958（昭和33）年には九州大学医学部に在籍し、博士号を取得していたことまで確認することができた。今後、この線から更に調査を続けていく。」とまとめた。しかし、この線からの更なる調査が難航していたところに、上述の国会図書館の調査環境向上が図られ、いくつかの進展を見ることができた。

リニューアル後の国会図書館のシステムにおいて、劉宗幹医師の資料として追加された資料で重要なものは、2023（令和5）年1月に発見した医籍総覧西日本版である。(写真2) この資料により、劉宗幹医師は現在の福岡県春日市で劉医院を開業していたことがわかった。そこで、福岡県春日市を管轄する医師会のことを調べてみたところ、この地域は筑紫医師会という長い歴史を持っている医師会があり、周年記念誌を積極的に発刊していることもわかった。国会図書館システムで検索すると筑紫医師会70周年史がヒットした。筑紫医師会の会員名簿の中に竜宗幹とあるが、生年月日、出身大学の記述からすると劉宗幹医師と同一人物であると考えられる。(写真3) また、竜という苗字で、写真も掲載されていた。(写真4)

ここまでの調査から、劉宗幹医師の消息を追うには福岡県春日市の現地調査をする必要性を感じたので、春日市のホームページで公開されている情報から、春日市で活動している郷土史研究会を見つけた。ホームページからは会の活発な活動が伺え、参考となる情報があるかもしれないと考え、春日市文化財課を通じて代表者の寺崎直利氏に連絡を取った。レターパックで調査のお願いと関係資料を郵送してすぐ、代表の寺崎氏から驚く返信が届いた。劉宗幹医師の春日市での暮らしぶりがよくわかる証言であるので、寺崎氏の許可のもと、下記のとおり引用する。

「劉先生のこと 先生は現春日市大和町1丁目で、劉医院を営まれていました。私が知っているのは昭和37年頃中学3年のころからです。内科医院でした。表札には九州大学医学部博士と書かれていました。当時大和町は国鉄雑餉隈駅（ぎょのくまえき—現南福岡駅）に近く、住宅密集地でしたが、近くに病院はなく、周囲の人たちに頼りにされていました。夜間でも患者が出れば、往診行かれていました。自分は台湾人であることを言っておられていました。周

困の人が悪く言っているのを聞いたことはありませんでした。私は大学4年間福岡から離れていましたが、帰ってくると病気になれば劉先生にみてもらっていました。私が高齢を持ち現地に移り、劉医院から約3kmほど離れていますが、子供が夜病気の時など連絡すると、すぐ来てくれていました。容貌は写真のように、頭はごま塩、面長でした。(中略)そして「台湾はいとこだぞ」「半年に一度は帰る」と言っておられました。今私が思うのは福岡だと台北との直通便で2時間ほどであり、台湾に近く帰りやすかったのではと思います。

奥様は日本人でした。医院の看護婦の役目をされていました。お二人に子供はいなかったと思います。先生は昭和59年前後に亡くなられたと思います。(中略) 医院はその後なくなりました。子供もいないし、縁者、台湾の出身地も知りません。あれほど台湾に帰ってあったので台湾に関係者がいると推察されますが、今は皆目不明です。」寺崎氏からの返信はとても奇遇なものであり、同時に大変貴重なものとなった。花巻空襲を経験した中山先生こと劉宗幹医師は台湾には帰国せず、最初は石鳥谷で、その後九州大学で研鑽を重ねた後、福岡県春日市で地域医療を支える生涯を送ったことが貴重な証言として得られた。

4 劉宗幹医師と台湾の関係性について

上述の寺崎氏からの資料によって、劉宗幹医師は半年に一度の頻度で台湾を訪れていたことがわかったことは大きな収穫であった。筆者は2022(令和4)年9月に国立公文書館アーカイブで劉宗幹医師の博士論文に関する公開資料の中から履歴書を入手していた。(写真5)履歴書には九州大学で博士号を取得するまでの経歴のほか、台湾における本籍地も表示されている。この史料をみつけたときは非常に驚いたが、写真2を発見した2023(令和5)年6月時点では、春日市に開業したときに台湾との関係性が途切れてしまい、前年に見つけた履歴書の台湾本籍地の情報は役に立たないのではないかと考えていた。しかし、春日市に居住して以降も劉宗幹医師と台湾の関係性は維持されていることがわかったため、今後台湾本籍地周辺の調査を行えば、劉宗幹医師の足跡が必ず見つかり、蔡先生に繋がる情報を得られるものと期待している。

5 むすびにかえて

花巻空襲で自身も命の危険に接し、同行していた蔡先生の死を間近で目撃した劉宗幹医師がその後どのように人生を送ったのか。心理的に大きなダメージを受け、様々な困難のある人生を過ごしたのではないのだろうか。このテーマを追い続けてから、気が付けば10年が過ぎていたが、このような疑問は筆者の心にいつも存在していた。しかし今回、劉宗幹医師が福岡県春日市で家族を持ち、地域住民に尊敬されながら、終生地域医療の向上に尽力されたことが奇しくもわかり、筆者は大きな安堵感に得ることができた。

一方、花巻厚生病院で劉宗幹医師や蔡先生と同僚だった看護師藤原やちよ氏が次のように記していることから、本レポートを執筆している時点での世界情勢や日本の状況について、今の時代に合った示唆を得ている。すなわち、「戦後日本の国の変化は驚くばかり82歳の婆には目が廻るだけです。戦争では苦しんだが心は豊かだったと思っております、いうも悪いけど今の若者達は金が有れば何でも手に入る時代ですが、惜しいことに心が貧乏になって来ている様に感じます。(中略)暇に任せて戦争の恐ろしさを書き残しておきます。平成17年8月20日、82歳、藤原やちよ、書く」(※句読点は著者が表記したまま。)

今回寄せられた藤原やちよ氏の手稿を読んで、現在世論の注目を集めているいわゆるキックバックという政治家の裏金問題は、藤原氏の言う「金が有れば何でも手に入る時代」との指摘に繋がるものであり、また、戦争の記憶が薄められつつある現状と歴史修正主義の流行を思うと、身近な地域での悲惨な戦争の記憶を残すことに努めた氏の意識の高さに、歴史を学ぶ者として模範とすべき気持ちを一層強く持つとともに、深い敬意を表するものである。

※追記

本レポートを提出した後、福岡市に本社を置く西日本新聞社編集局クロスメディア報道部デスクの福間慎一氏より劉医師の消息に関する情報の提供があった。それによると劉医師は、1984（昭和59）年4月16日に発生した自動車事故によって死亡したとのことであった。

上述のように劉医師のその後の生活に安堵した筆者であったが、その最期のことを知り、深い悲しみを覚えるものである。

引用文献

- 筑紫医師会 1977 筑紫医師会70周年史 筑紫医師会 p.24,446,447
寺崎直利 2023.7.25付けの筆者あて私信
藤原やちよ 2013 山村に育って 八十九年の足跡 p.21 及び同原稿の一部（横島正紀氏提供）
布臺一郎 2020 2020年における花巻空襲の調査の進展について 花巻市博物館研究紀要第16号 p.54-56
保険医療調査会 1964 医籍総覧西日本版 医事公論社 p.105

写真1 藤原やちよ氏の原稿(下線は筆者)

科の中山先生と外科の蔡先生綺麗な女の先生で二人共台湾から来ている先生である日は土曜日で病院は午前中で12時の列車に乗る為に花巻駅で空襲に合い松葉林に逃げた処を敵に狙われ蔡先生が亡くなりました中山先生は爆風で飛ばされかろうじて命は助かり蔡先生が亡くなった事を知らせに病院に来て呉れましたので夕方タンカを持って先生の死体を運びに行ったら花巻の駅前の家は木っ端微塵で松林に行ったら死人の山手足は皆ばらばら見るも惨たんたる光景蔡先生を見つけてタンカで運びローソクの灯りで手術をしました、松林の松の葉は全く木には有りませんでした。

写真2 医籍総覧西日本版105ページ

劉 宗 幹 医博 春日町大和町一
 二八三六
 内児 劉医院 台湾出身大2・5・6
 生昭18日医大卒 昭二〇八〇六号 昭36
 昭32九大第三内科教室に研究大
 学院入学同36・11開業(学位)昭34
 受領(九大)主論文「人頭蓋冠に於
 ける縫合の発生学的研究に就て」
 (恩師)森優(趣味)レコード(家庭)
 妻敏子

写真3 筑紫医師会70周年史（下から4行目に「竜宗幹」とある。）



写真4 筑紫医師会70周年史（前列左2番目が「竜」氏）



写真5 劉宗幹学位授与許可文書 (国立公文書館アーカイブ所蔵)

履 歴 書

本籍地 台湾省新竹州竹南郡後龍庄新港_字埔頂23番地
 現住所 福岡縣福岡市高畑新町85番地

劉 宗 幹
 大正2年5月6日生

學 歴

昭和7年3月20日 新竹州立新竹中學校卒業
 昭和12年4月1日 日本醫科大學 豫科入學
 昭和15年3月25日 同校 豫科 修了
 昭和15年4月1日 日本醫科大學 醫學部 第一學年 に進級
 昭和18年9月20日 同校 醫學部 卒業
 昭和31年6月1日 九州大學 大學院 入學 (指導教官 森教授)
 昭和33年5月31日 同大學院 修了

職 歴

昭和18年10月1日 東京都京橋区木挽町2丁目1番地南胃腸病院勤務
 昭和18年11月8日 醫師免許証下付せらる (第108906号)
 昭和18年12月31日 同病院 退職
 昭和19年3月1日 岩手縣稗貫郡花巻町花巻厚生病院勤務
 昭和23年2月28日 同病院 退職
 昭和23年3月1日 岩手縣稗貫郡新堀村に於て 醫院 閉業
 昭和27年9月1日 岩手縣稗貫郡八重畑村に 移転
 昭和31年5月31日 同醫院 閉業
 昭和33年9月1日 九州大學 醫學部 研究生 入學 (指導教官 榎屋教授)
 現在に至る

花卷市博物館研究紀要

第19号

令和6年3月26日 印刷

令和6年3月26日 発行

発行 花卷市博物館

〒025-0014

花卷市高松第26地割8-1

TEL 0198-32-1030

印刷 八重樫孔版社

〒025-0071

花卷市愛宕町8-8

TEL 0198-23-2544

©花卷市教育委員会

**Research Bulletin
OF
HANAMAKI CITY MUSEUM**

Tokan Tada's Footprints in Hanamaki :

Reading His Diaries, "Kannon-do records", and Letters (2)

..... Kasumi MATSUHASHI (3)

Progress in Research on Hanamaki Air Raid in 2023

..... Ichiro FUDAI (23)

EDITED
BY
HANAMAKI CITY MUSEUM